

前川國男に学習院大学から戦後復興と新制大学発足の象徴となる校舎群の設計が依頼されたのは、1958年7月のことである。翌1959年6月に総合計画が完成し、8月に着工、約1年の工期を経て、1960年7月、4階建ての北1号館(政経文学部棟)と南2号館(理学部棟)、2階建ての本部棟、「ピラミッド校舎」と呼ばれる四角錐形の中央教室の4棟からなる延床面積約1万2千㎡の校舎群が竣工する。この建設により、焼失を免れた戦前の二つの校舎にL型に囲まれ、「グラウンドとして使用されていた空間は新築校舎群となってその様相は一変」⁽¹⁾する。前川は、何を実現させようとしたのだろうか。設計チーフの河原一郎は、次のように記している。

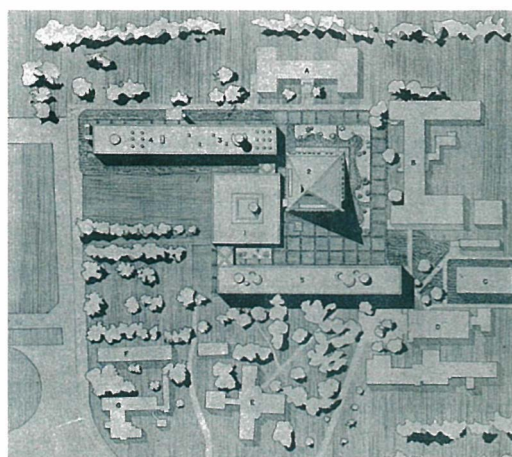
「森に囲まれた敷地は大学の敷地としてはきわめて恵まれているが、点在する建築群はわれわれを啞然とさせるほどの混乱ぶりを呈している。私どもはまず二つの中心、つまり学問のコアと学生生活のコアとを設定し、そこから始めて、年輪が広がるように徐々に増築をしていく方法を考えた。」⁽²⁾

そして、校舎群で構成された「学問のコア」について、次のような説明が続く。

「武蔵野台地の上に一つの広場を据えてその周りを回廊やピロティで囲み、(中略)建物群の作り出す空間の移り変わりや広がりの中に、修道院のような静かな瞑想的中庭をつくりだし、学問的な雰囲気をつくりだそうとした。」

安い絹を着るよりは丈夫な木綿を着ようという質実剛健な精神に則ったり、工事費の安さに負けることなく知恵の塊である空間を生かすことによってこれをなしとげようとした。中庭の中の大教室は4角錐となったが、私どもに大切なのは4角錐による象徴ではなく、人々を包み込む広場なのである。」

配置図〔図1〕に描かれたように、主要なテーマとなったのは、7.5×7.5mを基本グリッドとする厳格な秩序を敷地全体に与えつつ、2つの校舎棟と中央教室の足元にピロティを取って連続する回廊を設け、既存の2つの校舎との間を含めて、「学問のコア」となる広場



〔図1〕基本計画の配置図 【新建築】1960年10月号より転載

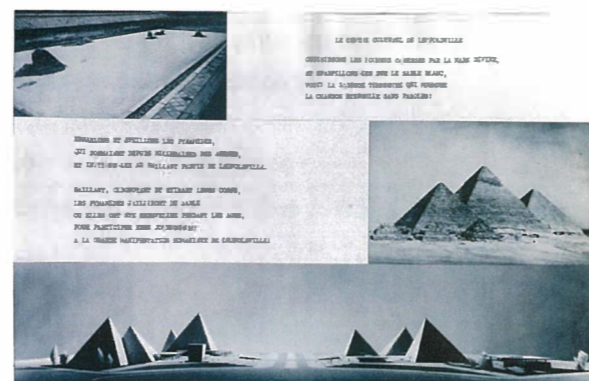
的な空間を創出することだった。だが、なぜピラミッド型の大教室〔図2〕になったのか。実は、当時は20mの高さ制限があったため、それを超えるピラミッド

著作権の関係上、掲載不可

〔図2〕理学部棟から自作建築群を眺む前川國男 1961年 Burt Glinn/Magnum Photos/アフロ

教室は、「高さ制限緩和許可願理由書」が東京都へ提出されて許可を得ている。そこには、この造形に込めた前川の意図が、次のように説明されていた。

「大学がその歴史と伝統に基き理想追求の場として、象徴を建築的表現に求める事は自然である。本大学も亦学制改革に伴って、大きな改新を求められ、新時代に適応すべく再出発、その象徴として清新なる表現を



〔図3〕レオポルドヴィル文化センター公開コンペ応募案 1958年*

求めている。斯かる場合在来は「塔」を作る事により、その具体的表現として居たが、形式化した塔は建設費が徒に増すばかりで、本大学の理想からも遠い。出来れば構造的及機能的な要求を満足させ、且経済的にも成立し得る造型を以って本大学を象徴しようと考えた。その為には700人を収容する集会の場としての大教室を選び、それを最も安定した架構で造り且、空間的にも十分な表現を持たせるように整理追求した結果「ピラミッド」形を生み出すこととなった。」⁽³⁾

前川は、戦前の権威の象徴のような「形式化した塔」ではなく、戦後型の大学像に相応しい集会と講義の行



〔図4〕ル・コルビュジェによるシャンディガールの建築群 1956～62年 撮影/著者

われる大教室こそキャンパスの象徴にしたいと願ったのだ。また、ピラミッドの造形は、唐突に発想されたものではなかった。1958年に応募したベルギー領コンゴの首都に計画された文化センターの公開コンペ案〔図3〕において、前川は、ピラミッド型の複数の棟からなる群造形を試みていた。注目されるのは、龍安寺の石庭のように、ピラミッドの周囲に余白としての広場の創出が意図されていたことであり、この方法が学習院大学に引き継がれたのである。

こうして竣工した学習院大学は、そのモニュメンタルな造形が目されたのだろう。国内にとどまらず、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアなど10誌にわたる建築雑誌に掲載される。中でも、フランスの『l'architecture d'aujourd'hui』(1961年10・11月号)には、6ページにわたって大きく紹介された。ル・コルビュジェもこの誌面を目にしたのだろう。感想の手紙が前川に届いたという。最晩年の前川の回想が残されている。

「学習院のピラミッド(中略)コルビュジェから手紙をもらって「面白いアイデア」だといって誉められたのはあれひとつだよ。その「はがき」をとっておいたら、犬がくわえてちぎっちゃったよ。(笑)」⁽⁴⁾

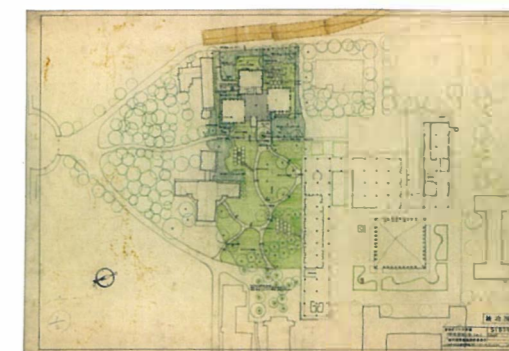
ル・コルビュジェが関心を示したのも無理はない。彼自身も、インドのチャンディガールの都市計画で、複数の建築と広場から構成された群造形〔図4〕を試みていたからだ。偶然にも、師弟は同じテーマを巡って競い合っていたことになる。



〔図5〕学習院大学図書館 1963年 正面西側外観 撮影/浅辺義雄

そして、続いて前川が手がけたのが、3年後の1963年に竣工する学習院大学図書館〔図5〕である。木造の旧図書館(1909年)は、関東大震災や太平洋戦争にも耐え、半世紀以上にわたって大切に使われてきた。しかし、1949年の新制大学発足後、急増する学生数と増え続ける蔵書に対応できなくなっていた。そこで、末松保和館長を委員長とする建設準備委員会が図書館構想を立案、「学生図書館という性格」に重点を置いた基本方針を決定し、再び前川が設計依頼を受ける。この時、前川は、「設計の基本となるようなアイデア」を館長に求めたという⁽⁵⁾。末松は、旧図書館の平面的特長である「十字型の意匠を現代風にアレンジする案」を伝え、それが新図書館設計の基本方針となっていく。

こうして、旧図書館の十字型平面をアレンジしたような、14.4×14.4mの正方形プランの3つの閉じた閲覧室や書庫のボリュームと開放的なロビーの組合せ



〔図6〕学習院大学全体配置図*

からなる、リズムカルな空間構成が発想される。そして、全体配置図〔図6〕からも読み取れるように、正方形プランによる内部の単位空間の広がりや、外部へと展開し、緑深い前庭とも相俟って、心地好い周辺環境をつくり上げたのである。設計チーフの美川淳而は、次のように書き留めている。

「この図書館は、今までの静かな、本を読むためだけの図書館ではなく、学生の生き生きした流れを、庭を通じて図書館の中に引き入れたかったし、またこの木の多い囲りの環境を、この建物を建てることによって、なお一層良いものにしたかった。またこの建物は、建物のエレベーションの恰好よさより、室内空間の良さ、庭とのつながりの方が重要だった。そのため、家具配置計画(中略)、家具設計に相当な重さをおいていた。(中略)柱の無い部屋に、壁、家具等にかこまれた読書コーナーが散らばっている、というのがわれわれのねらいだった。(中略)読書を中心とした集りの場所でありたいと考えた。」⁽⁶⁾

1950年代後半から1960年代初めにかけての高度経済成長が始まる時期だったとはいえ、厳しい予算状況と限られた時間の中にもありながらも、このような考え方が連続して盛り込まれていたからなのだろう。前川が信頼を得て取り組んだ学習院大学には、象徴的なピラミッド型の中央教室を中心に置いた群造形による広場と、それと連続的につながる学生たちの生き生きとした「集りの場所」としての図書館が誕生する。これらの建物は、戦後の新制大学として歩み始めた学習院大学にとって、文字通り、「学問のコア」としての骨格となるものだったに違いない。そして、前川も、ここで得た群造形と単位空間の連続という設計の方法論を、続く埼玉県立博物館(1971年)から、東京都美術館(1975年)、熊本県立美術館(1976年)、福岡市美術館(1979年)など、最晩年に至るまで追求していくことになる。その意味で、学習院大学の建築には、前川の求め続けたものの原形が刻印されている。これらの建築が、これからも良い形で使われていくことを願わずにはいられない。

(1) 学習院大学五十年史編纂委員会編『学習院大学五十年史 上巻』2000年学習院大学発行、p.458
 (2) 河原一郎「建築計画について」『新建築』1960年3月号
 (3) 前川國男「学習院大学新築工事に関して 高さ制限緩和許可理由書」東京都公文書館内田祥三資料
 (4) 「建築における《真実・フィクション・永遠性・様式・方法論》をめぐって」『新建築』1984年1月号
 (5) (1)に同じ、p.643-645
 (6) 『建築』1964年1月号

*資料提供/前川建築設計事務所

